

「没後10年記念 三岸節子展」

2010年6月8日(火)～7月4日(日)

力強く、情熱あふれる絵画で知られる三岸節子(1905-1999)は、女性洋画家の第一人者として先頭に立ち続けました。彼女にとって描くことは生きることであり、絵は祈りそのものでした。節子の心の旅路をたどりつづ19歳から93歳まで、日本やヨーロッパで制作し続けた室内画や風景画・心象風景画、また人気の高い「花」シリーズなど油彩画82点と素描36点を展覧します。以下、展覧会の構成を章ごとにご案内いたします。

★第1章 初期～壮年期(19歳～63歳) 「画家、苦難の人生への出発」

節子は明治38年(1905)、愛知県起町(現在の一宮市)の裕福な家庭に四女として生まれました。19歳で女子美術学校(現女子美術大学)を首席で卒業し、同年洋画家の三岸好太郎と結婚。29歳で3人の幼い子供をかかえた未亡人となり、戦争中も疎開せずに静物画を描き続けました。19歳の自画像に始まり、室内画・火の山の鳥シリーズ・太陽讃歌シリーズなど、油絵具を厚く塗り込み、スケールの大きい画面構成を特徴とした、独自の絵画表現を確立していきました。

★第2章 成熟期(63歳～84歳) 「渡仏、新天地を求めて」

戦後、人気作家となった境遇にも満足せず、63歳から息子の黄太郎一家とともに南フランスに渡り風景画という新たな領域に挑戦、カーニユ、そしてヴェロンに定住します。ヴェネチアやスペイン、シチリア島などヨーロッパ各地を自動車で取材旅行し、町並みや小運河など風景画制作に情熱を注ぎ、フランス在住は5年間の予定が20年にも及びました。

★第3章 最晩年(84歳～94歳) 「日本への帰国、広野の1本の木のように」

帰国してからは大磯のアトリエで、90歳を過ぎても「私は人物画が描きたい。最後は人物といきたい」という作家の言葉を実現した《ブルゴーニュの少年と鳥》、《桜がさいた》などの制作を続け、命の火が燃え尽きるまで情熱が消えることはありませんでした。

★第4章 「花」

節子は花の作品を生涯描き続けました。静物や風景を描くかわらで、花は常に重要なモチーフでした。花を育てそれらを描くことをこの上ない幸せであるとし、花そのものの生命力を描き出そうとしました。花の作品群は大変人気が高く、画商の需めに制作が追いつかないほどでした。

★第5章 「好太郎と黄太郎」

夫・三岸好太郎、息子・三岸黄太郎の作品も特別出品します(好太郎7点、黄太郎4点)。天才画家との評価を得た好太郎の奔放な恋愛癖に心を痛め、彼の死によって10年の短い結婚生活を終えたあとも、生涯尊敬の念を抱き続けました。黄太郎は母と同じ画家としての人生を歩みつつ、母のヨーロッパ各地への取材旅行に際しては運転手を務めるなど献身的に尽くします。「二人のコウタロウ」は、節子の生涯と作品に大きな関わりを持ち、なくてはならない存在でした。

★岡山展特設 素描コーナー

グワッシュ・クレパスなどを用いた素描作品36点は、岡山展だけに出品されるもので、油彩が加えられたものはかなり重厚感があります。勢いのあるタッチや各種画材による独特なマチエールは、油彩作品と違った魅力が楽しめます。



《花》1980年代
油彩



《ヴェネチア(ブチカナル)》1970年
クレパス・油彩

【主任学芸員 中村麻里子】



赤松麟作「水鳥のいる風景」

刊行物のご案内

①「中高生のための『岡山の美術』原田直次郎と赤松麟作」

当館発行の「中高生のための新書シリーズ」5冊目となりました。

今回は岡山ゆかりの2人の洋画家について紹介します。明治中期にドイツに留学し、帰国後の活躍を期待されながらも早世した原田直次郎と、明治末年から昭和の戦後に至るまで大阪で活躍した赤松麟作の当館所蔵作品の他、各地の館で所蔵されている代表作などについても図版入りで紹介し、彼らの歩んだ生涯を共にたどりながら、作品の概要や動向をわかりやすく紹介しています。

②「岡山県立美術館紀要第2号」

当館学芸員による専門領域での研究を広く知っていただき、その成果を発表するためのものです。平成20年度に創刊されました。

目次

守安 收・・・「宮本武蔵像」と武蔵が描いた肖像画
中田利枝子・・・〈作品紹介〉野崎家所蔵『大山寺縁起絵巻』について
中村麻里子・・・宮本君山『漢画獨稽古』について－技法(画材・用具・用法等)解説を中心に－
細田樹里・・・坂田一男 帰国後作品にみる作風の変遷と特徴－色面分割に着目して－
岡本裕子・・・学校と美術館の連携－5年間を振り返って－

■平成22年3月31日発行

① ■A5 変形版 112ページ ■県内の中学校、高校、大学の図書館等に配布

■当館にて500円で販売中

② ■A4版 68ページ ■県内の図書館および、全国の主要美術館等に配布

■販売はしておりません



平成22年度 展覧会スケジュール(6月～9月)

特別展紹介(地下1階展示室) 6月8日(火)～7月4日(日) 没後10年記念 三岸節子展
7月16日(金)～8月22日(日) パスキンとエコール・ド・パリ展
9月1日(水)～9月12日(日) 第61回 岡山県美術展覧会

岡山の美術展紹介(2階展示室) 7月8日(木)～10月3日(日)
・おかやまアート・コレクション探訪Ⅲ
森文雄版画コレクション【前期:～8月22日(日) 後期:8月24日(火)～】
・緑川洋一の写真「灼熱に挑む一島の精錬所」

美術館講座

7月10日(土) 森コレクション・近代日本の版画
講師:妹尾克己(学芸課長)
7月31日(土) パスキンと国吉
講師:妹尾克己(学芸課長)
9月11日(土) 岡山の仏像
講師:中田利枝子(主任学芸員)

美術の夕べ

7月23日(金) パスキンとエコール・ド・パリ展をみる
講師:妹尾克己(学芸課長)
8月27日(金) 近・現代美術の版画 森コレクションをみる
講師:妹尾克己(学芸課長)
9月24日(金) 岡山の美術を見るⅡ
講師:岡本裕子(主任学芸員)

編集後記

美術館ニュースの89号をお届けします。今号から新しく編集担当をすることになりました。変わらずご愛読いただければと思います。前回の特別展「アンコールワット展」では、多くのお客様にご来館いただきました。仏像を前にし、異国の文化に触れるだけでなく、その土地の香り、空気までも体感できたように感じます。

【O.M.】

美術館ニュース 第89号

発行:2010年6月

発行者:岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL:086-225-4800
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

赤松麟作 「水鳥のいる風景」一九〇三年 油彩・キャンバス 六〇・七×四五・六cm 当館蔵

薄明かりの頃、空には雲がかかり、遠景の山のシルエットはほんやり霞む。草木が生い茂った家のまわりには人の気配はなく、水辺に降りたち脚をついばむ鳥だけが活動している。名もなき場所の、ありふれた身の回りの自然が描かれている。

赤松麟作(1878-1953)が東京美術学校で黒田清輝たちから学んだ作風は、アカデミックな写実性を保ちながらも、戸外の光の明るさを適度に画面のなかに取り込もうとしたもので、影になる部分に黒ではなく紫色を用いることから「紫派」とも称された。

この作品もまさに紫を基調とした画面になっているが、おぼろげな間接光で満たされた風景は、印象派ほどには純粹に感覚的に光を描写しない、穏健な外光派にとって、描写しやすい風景であったとも言えよう。

東京美術学校を卒業後、中学の図画教師として赤松が勤務していた頃の作品。

【学芸員 廣瀬就久】

鍵岡館長の
美術館体験の記
⑤

「美術館とデザイン」③

美術館のポスターをはじめグラフィック・デザインは、美術館の美意識を反映する。展覧会でのポスター、チラシ、チケットなどの媒体物や展覧会カタログのデザイン、美術館そのもののポスターやロゴ・マーク、封筒、レター・ヘッドなど、また年間スケジュールや美術館ニュース、それに美術館紀要や年度報告書を加えてもよい。こうした美術館の存在意義を外部に伝達し、美術館活動を発信する。情報を発信するために制作されるモノに伝わるグラフィック・デザインは、美術館のセンスを試される。よくデザインされた広報物を製作し、刊行する美術館は、それだけですでに美術館という美を扱う館の存在を人目につかせるだろうが、デザイン・センスのないそれらを目にする、美術館人のイロハを疑いたくなる。

展覧会のポスターをとりあげてみれば、「図形と文字、ポスターの紙やそれを規定する短形の平面のなかに、視覚的要素相互間の関係を操作することによって視覚言語を機能する」といった堅い定義めいて言うことができる。

僕にはセゾン美術館(西武美術館)でのグラフィック・デザイナー田中一光との出会いは決定的であった。日本の文字は漢字、ひらかな、カタカナ、それにローマ字さえ使うがために、田中一光は文字の配列を徹底的に研究し、田中一光タイプを独自に作りあげるまでに至る。文字や図形の関係性のなかに、空間をつくりだし、田中の個性あるところと私たちを持ちこみ、ポスターを美術作品に高めた。まさにグラフィック・デザインはクリエイティブな仕事である。田中デザインはやがて美術館全体のアート・ディレクターとなった。

たった一枚のポスターをめぐる、担当学芸員がいかに展覧会を表現したいかを、デザイナーはその意図をヨリ明快・簡潔に他者に伝達する。そしてなによりも人々の眼を愉しませる。

美術館に係わるあらゆるデザインー建築デザイン、展示空間、ポスターなどー、よくデザインされた美術館は、刺激的で心地よい。

【館長 鍵岡正謹】

よそんちの展覧会 —動物園編・続—

作品を守ること — 博物館の数ある使命の中でも最も基本中の基本です。私たちが日頃から「作品には触らない」「展示室では走らない」「ペンは使わない」等々、作品を傷つけるおそれがある行為を禁止しています。動物園においては、動物たちが守らなければならない「作品」です。子どもたちには楽しい「えさやり体験」も適切に行わなければ毒になりかねません。決められたえさ以外のお菓子や包みを投げ入れる、いくら注意をしても後をたたないでしょう。とある動物園では、えさの販売機、檻の前にびっしりと飼育員さんの恨み節が書かれていました。かわいい動物たちの命に関わることでですから、その気持ち、よくわかります。が、「子どもら読まんよな…」その責めは保護者である大人が負うべきですが、大人がお菓子を投げて子どもに見せたりするものですからいたたまれません。「えさやり体験」なんてやめてしまえ。そもそも「公開」しなければ危険は避けられたかもしれません。しかし「公開(活用)」することが博物館の使命でもあるのです。

先日、国立科学博物館に行きました。独立行政法人になって以後、すっかりイメチェンした科博。重要文化財に指定された旧本館(日本館)も展示が一新され、かつてのなんとなく怪しい雰囲気はなくなりましたが、好奇心をくすぐる作品たちで満ちていました。開催中の「大哺乳類展」は、迫力ある剥製群、骨格標本群が見どころで、かなりの混みようでした。毛皮のタッチングコーナーに、多くの人に触られ、毛が抜け、すっかり剥げてしまった資料がありました。「あえて展示した」とのコメントを新聞紙面で見ましたが、来館者の多さ(GW後には20万人を突破したとか)に、本当によかったの?と思わざるを得ません。また、上野動物園からは小動物たちもやってくるようですが、目と鼻の先、だから、であるがゆえ、本当に必要な?という気にもなりました。

私たちは「作品(動物)に親しむため」「理解を深めるため」「展覧会を見てもらうため」等々さまざまな事業を行い、また、享受しています。どこかで、楽しさや大義名分に潜むリスクに、自覚的でなければなりません。 「保存」と「公開(活用)」を天秤にかけて…。

【学芸員 福富 幸】



剥製になった動物たちはじっと私たちを見つめています。



毛皮のタッチングコーナー

展覧会紹介

パスキンとエコール・ド・パリ展
—北海道立近代美術館の所蔵品による—

2010年7月16日(金)～8月22日(日)

エコール・ド・パリとは1920年代にパリで制作した画家達のグループを指す名称ですが、それに属する画家達にはユダヤ系の画家が多く、モディリアニ、キスリング、シャガール、スーチンなど、さらに日本から来たフジタらの外、フランス生まれのローランサン、ユトリロ、ドランなどが含まれます。彼らの作品に共通しているのは、フォーヴィスムやキュビズムなどの造形上の成果をとりいれながらも、そうした絵画の革新へと向かうよりも、哀愁に満ちた人生のドラマ、実人生の愛と孤独、希望と挫折をうたっていることでしょう。

ブルガリア生まれのユダヤ人画家ジュール・パスキン(1885～1930)はエコール・ド・パリを代表する画家の一人です。エコール・ド・パリの画家たちの多くは、閉鎖的で保守的な祖国を離れ、「自由解放区」パリで異邦人として暮らしながらも、各自の民族性、文化的伝統に根ざした造形精神を持ち続けたところに共通するものがあります。パスキンは故郷を離れ、ドイツ、フランス、アメリカと移り、1920年以後はパリで制作しました。

パスキンは、哀愁を帯びた、けだるい、官能的でしどけないポーズの女性像やあどけない少女達を淡い色調のなかに溶け込ませるように描き、画壇での地位を築きました。毎週のようにお祭り騒ぎのパーティを催し、歓楽の合間に描いた作品は高値で売れ、まるで自らを切り売りして才能と時間を浪費しているかのようなでした。一方でパスキンは複雑な愛憎のもつれと孤独を抱え、芸術上の成功と挫折は、45歳で自らの人生を閉じることになりました。

この展覧会では、北海道立近代美術館の所蔵する作品の中から、パスキンを中心に、ユトリロ、キスリング、シャガール、ローランサン、スーチン、フジタなどエコール・ド・パリの画家達の油彩45点に加え、パスキンの水彩・デッサン約90点を紹介します。

パスキンはアメリカにいたとき国吉康雄と知り合い、亡くなるまで親友として深い付き合いがありました。国吉のパリ滞在はパスキンの導きによるものであり、パリでの経験はその後の国吉の芸術にとり重要な意義をもちました。当館の国吉作品とあわせて御覧いただき、二人の芸術を比べて見ていただく機会としたいと思います。

【学芸課長 妹尾克己】



ジュール・パスキン<花束をもつ少女> 1925-26年



モーリス・ド・ヴラマンク<風景> 1920年頃 © ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010



ジュール・パスキン <ソファに寝かけるシュザンヌ> 1911年

おかやまアート・コレクション探訪Ⅲ 森文雄版画コレクション

会期/前期:7月8日(木)～8月22日(日) 後期:8月24日(火)～10月3日(日)



斎藤 清<会津の冬(51)>



畦地梅太郎<助かった鳥>

おかやまアート・コレクション探訪の第3弾では森文雄版画コレクションを紹介します。版画は一枚物の絵画に比べると入手しやすいこともあり、版画を愛好し収集するコレクターは多いようです。今回紹介するコレクションもこつこつと集められたもので、1000点あまりの作品があります。集められたのは森文雄氏。氏は1923年に総社に生まれ、第六高等学校、東京大学フランス文学科を卒業後岡山に戻り、倉敷市内の高等学校で英語を教えるかたわら、木彫を学び、版画を制作、またエッセイストとしても文章を書かれました。刊行された本には「やぶ蚊ぶんぶん」(2003年)「人さまごま」(2005年)などがあります。40代のころから版画のコレクションを始められた森氏は持病である喘息と戦いながら、版画の世界に魅せられて、さまざまな技法、傾向の作品を幅広く集めていきました。浮世絵から始めて、次第に手を広げてゆき、洋の東西を問わず、近代から現代版画まで多様な作品が収集されています。森氏の好みは日本の戦後の版画家に重きが置かれており、斎藤清、平塚運一、畦地梅太郎、笹島喜平などの作品が多く含まれます。

前期では、日本の近代木版画の作家たちに焦点を当てて紹介し、後期では、森文雄版画コレクションの多彩な作品を紹介します。

【学芸課長 妹尾克己】

関連行事	ワークショップ	8月21日(土)13:30～16:00	木版画・刷ることを楽しもう
	対象/小学4年生以上定員20名	講師/関崎 哲(岡山県立大学准教授)	
	美術館講座(講義室)	7月10日(土)14:00～15:30	森コレクション・近代日本の木版画 妹尾克己
	美術の夕べ	8月27日(金)18:00～19:00	森コレクションを見る 妹尾克己

**** ニューフェイス紹介 ****

4月から学芸員として勤めております橋村直樹です。これまで大学で中世ヨーロッパのキリスト教美術、特にビザンティン美術について学んできました。ビザンティン美術とは、4～15世紀の間、コンスタンティノポリス(現イスタンブール)を都としたビザンティン帝国において作られた美術のことを指します。聖堂内のモザイク壁画やフレスコ壁画、写本挿絵や板絵のアイコンに代表され、欧米では大きな展覧会が定期的に行われるほど名高いのですが、残念ながら日本ではあまり知られていません。今後機会があれば美術館講座などでビザンティン美術の魅力について紹介できたらと思っています。

県立美術館では洋画を担当することになりました。展示室や収蔵庫で実作品をじっくり見て考えることのできる幸せを噛みしめながら、皆さまがさらに足を運びたいような美術館を目指して、魅力的な展示空間を作っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

【学芸員 橋村直樹】



今年の4月から岡山県立美術館で働くことになりました。尾崎碧と申します。名前は“みどり”と読みます。色のイメージで覚えて頂ければ幸いです。学生の時にはセラミックデザインの勉強をしていました。『セラミック』と聞くと、何か特別なモノのような気もしますが、主にろくろや鋳込みを使った焼き物のことです。

土に触れる感触はとても心地がよく、その粘土から硬質な焼き物に変化する様は何度経験しても不思議に感じてしまうものです。機会があれば是非一度、焼き物作りを体験してみてください。

美術館での仕事は主にデザインに関わることで、ウェブサイト、印刷物、館内キャプションの制作を行います。今は一刻も早く、館の仲間のサポートが出来るよう、努力を重ねる日々です。美術館に来館される皆様方の目線に立ち、わかりやすく、そして親しみやすいデザインを目指していきますので、どうぞよろしくお願いたします。

【学芸員 尾崎 碧】


